**【原稿の種別：論文/書評など】**

**唯物論研究協会シンポジウム報告**

―これは副題[明朝12ポ]―

唯 物 論 子[明朝12] YUIBUTSU, Ronko[Times New Roman12ポ]

# はじめに

これは《唯研電子ジャーナル》のスタイル・ファイルです。

この電子ジャーナル用原稿を仕上げていただくためには、このスタイルファイルにそのままタイトル、章、本文、注などを流し込んでもらえればいいわけですが、基本的な設定を説明しておきます。編集の手間をできるだけ少なくなるよう、ご協力をよろしくお願いします。

# I　文字フォントと大きさ等

本文は日本語は10ポ明朝。ローマ字はTimes New Roman系のものを使用してください。

見出しは10ポのゴチック太字です。下位の見出しを設けるときも基本的にゴチックを使用してください。

タイトルは18ポ明朝太字、長いタイトルの場合は小さいポイントにしても結構です。副題がある場合には12ポ明朝を使用してください。

氏名は明朝12ポ、半角スペースひとつあけてローマ字で氏名をTimes New Roman 12ポで。苗字は全て大文字にしてください。

タイトル、氏名を囲んでいる点線の枠線は、レイアウト枠を使用していることを示すためのもので、出版時には除去します。

II ページ設定

ページは余白が上・左・右が各30ミリ、下が20ミリ。1行22字の42行の2段組です（このページはタイトルがありますから、行数は違っています）。

ヘッダー、フッターは、こちらで処理します。ページは当然、号ごとの通し番号に変わります。

注と参考文献は9ポイント。形式は各自お任せします。以下、ダミーの文を挿入します。参考にしてください。内容はこの文書とは無関係です。

その他、細かい点は各自にお任せしますが、他の原稿との関係等を考えてこちらで修整したり、修整をお願いすることがありうることをご承知おきください。

# III　体系と反-体系―問題の所在

本稿は、初期ベンヤミンの体系に関する思想についての考察である。

哲学の歴史において体系の要求と、体系に対する批判は繰り返し主題とされてきた。体系を志向する哲学と体系批判の哲学は、時代によって攻守の関係を取り換えあってきた。

近代哲学の一方の端緒に位置するフランシス･ベーコンは学問の大革新をめざし、旧時代の知であるスコラ学の《体系》性について攻撃を加え、自らはアフォリズムのスタイルを選んだ[[1]](#footnote-1)。ヘーゲルが「学の体系第一部」と銘打った『精神現象学』において「真理が現実存在する真の姿は、真理の学的体系以外にありえない」と述べ、独自の哲学体系を構築しようとしたことはあまりにも有名である [Hegel 1970 14] 。

ヘーゲル派の体系的哲学がその影響力を失って後、19世紀末から20世紀初頭にかけては、おそらくニーチェの影響の拡がりにより（少なくともスタイル上の）反体系的思考と、かたや新カント派による体系的思想が拮抗していた時代だといえる。

　「私はあらゆる体系家も信用しない。私は彼らを避ける。体系への意志とは誠実さの欠如である」。新カント派の代表者のひとりリッケルトは1913年、雑誌『ロゴス』に掲載された『諸価値の体系』の冒頭にニーチェのこのことばを置き、哲学が他のあらゆる文化同様、発展しつづけるものである以上、「体系へ意志」は認識の進歩をみとめない「偏狭な精神のしるし」である、という一般的見解をそれなりに受け止める。そのうえでなおかつ、彼は「完結した=閉じたgeschlossen」体系でなく、「開かれた体系」を、つまり将来の具体的発展をも内に包摂しうるような、形式的規定に着目した諸価値の体系を構想した[[2]](#footnote-2) [Rickert 1913]。

　かといって反体系の側が、無邪気に勝どきをあげていたわけでもない。体系を否定する哲学は、自らの認識の部分性、相対性についてなんらかの弁明を試みざるを得なかった。

ゲオルク･ルカーチ『魂と形式』の冒頭を飾る『エッセイの本質と形式について』は1910年の日付をもつが、彼はエッセイについて、その語（エッセイ＝試み）の原義にも適った、プロセスの一部としての位置づけから、その断片的性格をもつという一般的理解を一歩越え出ようとする。「このようにみるとエッセイは、究極の目標に達するための欠くべからざる手段として、このヒエラルヒーのなかでの最後の一歩手前の段階として、是認されることになるだろう。しかしこれはエッセイのはたす営みの価値にすぎない。その存在という事実には、さらに別の独自の価値がある。つまり、前述の憧れは、諸価値の体系が見出されるならば、そこに成就を迎え、したがって止揚されるということになるかもしれない。だがこの憧れは、成就をいまやおそしと待ち受けるばかりのものではなく、それ自体の価値と実在性をそなえた魂の事実なのだ。」究極目標としての体系への憧れ、この「魂の事実」こそエッセイが書かれる動機である。憧れは、憧れの対象が成就、実現されることにより失われると考えられるのが通常である。しかし憧れ自体が形成されること、形をとることで「もはや別たれることのないもっとも固有の実体を得ることによって、憧れは永遠の価値へと救済され解放されるこの形成をもたらす」ことに、エッセイの体系に回収されない、独自の意義をルカーチは見出す[[3]](#footnote-3)。

本稿は、初期ベンヤミンにとって《体系》が何であったか、その一端をあきらかにする試みである。特に博士論文『初期ロマン派における芸術批評の概念』で、彼がドイツロマン派に見出した《体系》の意義について考察する。

一般に、ベンヤミンは、先のルカーチの系譜につらなる存在として理解されている。

このルカーチのエッセイ論が、ルカーチ自身、後にこの立場を離れ、またその生の哲学的な理論前提が共有されなかったにせよ、ベンヤミン、アドルノとつづく、一般に反体系的思想家とみなされる理論家たちに大きな影響を与えたことは疑いないだろう。

参考文献：

Lukács, Georg: Die Seel und die Formen.　Neuwied und Berlin(Luchterhand)　1971　(邦訳『魂と形式』川村他訳、未来社、1969年).

＊引用箇所を［原著ページ＝邦訳ページ］の順で記す。他も同様。

Rickert, Heinrich: Vom System der Werte. In: Logos. Hrsg. v. Richart . Hrsg. v. Richart Kroner u. Georg Mehlis, Band IV. Tübingen, 1913.

ベーコン：『ノヴム・オルガヌム』桂寿一訳、岩波文庫、1978年。

山本信（編）：『ヤスパース　マルセル』（世界の名著75）中央公論社　1980年。

1. [ベーコン 1978 140-1]参照 [↑](#footnote-ref-1)
2. この価値哲学は21年刊行の『哲学の一般的基礎』に若干の修正を施されたうえで取り入れられている。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 以上[Lukács 1971 ] [↑](#footnote-ref-3)